

◎育苗後半も適切な**温度**管理と**水**管理で**健苗**育成！

◎適期移植と適切な植付けで初期生育の確保！

今後も
高温傾向！

1 育苗後半の管理

温度

硬化期(1.5葉)以降の温度の目安は日中15~20℃、夜間8℃以上です。

遮光資材の掛けっぱなしは、床土の温度が上がらず、根の活力を低下させるので避けましょう。

なお、移植1週間前から、穏やかな夜間はハウスやトンネルを開放し、苗を外気温に慣らしましょう。

東北地方1か月予報 4/25~5/24 (4/23 仙台管区气象台発表)
東北日本海側の平均気温の**高い確率は50%**
日照時間は平年並か多い見込み

日中



15~20℃

夜間



8℃以上

硬化期(1.5葉~)以降の温度管理

灌水

朝のうち(床温がまだ低い時間帯)にたっぷり水をかけましょう。床土が白く乾いたり、葉が巻き始めたら部分的に灌水しましょう。ただし午後3時以降は灌水を避けましょう。

高温アラート運用開始
「あぐりん」で登録

追肥

追肥を行う場合は、稚苗育苗で1.8葉期に、中苗育苗で2葉期と3葉期に1箱当たり窒素成分で1gを施用します。

肥料(例)	N%	現物量/箱
液肥2号	10	10g
硫安	21	5g

高密度播種(密苗、密播)での注意点

- ①苗が老化しやすいので、慣行育苗以上に高温を避ける。
- ②苗の蒸散量が多いので十分に灌水する。
- ③苗の生育が停滞する前に移植する(葉数は2.0葉、育苗期間は20日が目安)。
- ④適期(2.0葉頃)に移植する場合、移植の3日前に追肥(N成分1g/箱)を行う。

苗の高温障害対応

例年になく育苗期間に高温に遭遇することが多く、マルチを除去する前の高温で障害が発生している苗も見られます。遮光資材を活用し、出来るだけ寒暖の差を少なくし、葉身からの急激な蒸散を防ぎましょう。

2 本当は重要な“代かき”

作業のポイント

- ①代かき時の水量は土塊が9割程度見えるくらいです。水が多いと、土壌表面の様子が変わりにくく均平作業がしにくくなるとともに、稲わら等のすき込みが難しくなります。
- ②砂質土壌では代かきを丁寧に行って漏水を防ぎます。

- ③ただし、代かきを過剰(作土すべてが羊かん状)に行くと、土壤還元が強まり、活着や根張りが悪くなり、初期生育の確保が困難になります。過剰にならないように注意しましょう。
- ④土塊は上層が細かく、下層が粗い状態が理想です。
- ⑤代かき時期は、移植2～3日前が理想です。土壤の性質に合わせた作業計画を立てましょう。

3 適期移植と適切な植付けで初期生育の確保

移植時期

移植適期は「5月10日～20日」頃です。遅れると穂数の確保が難しくなります(右図)。なお、移植は天候が温和な日に行いましょう。低温や強風の日の移植は、植え傷みのダメージが大きく、活着が遅くなります。

植付け

栽植密度は坪当たり70株程度、植込本数は1株当たり4～5本(㎡当たり植付本数100本前後)が基本

です。極端な疎植は、天候不順の影響を受けやすく、茎数不足や精玄米粒数歩合低下等のリスクを高めます。

植付け深は3cm程度とします。深植えにすると、生長点付近の温度が上がらず分けつ発生が抑制され、茎数が増えません。

植付け深を確認し、丁寧に植え付けましょう。

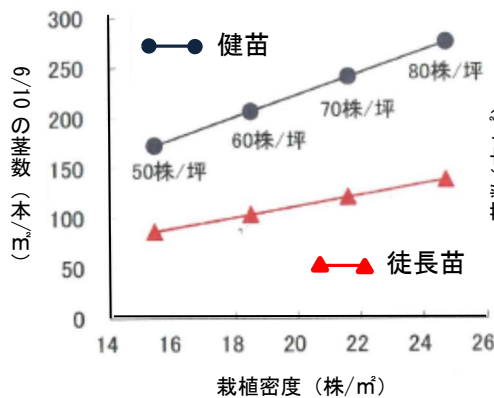


図2 苗質の違いと栽植密度毎の6/10の茎数 (農総研セ H25 つや姫)

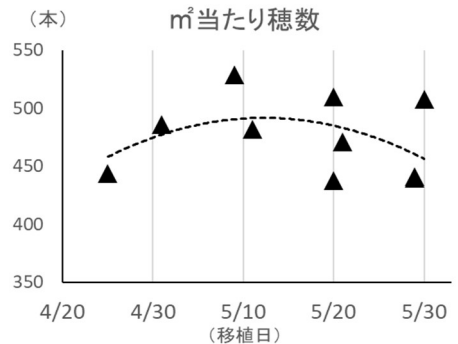


図1 つや姫の移植時期と穂数の関係 (水田農業試験場 H19～21)

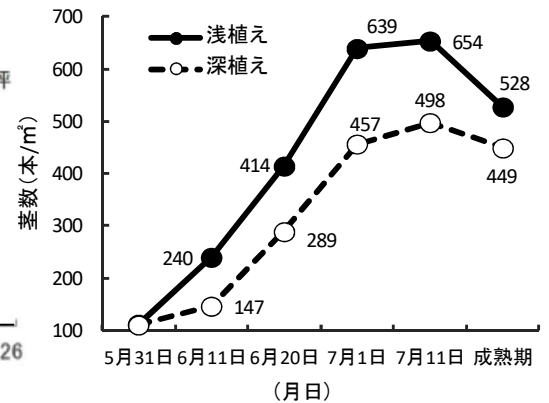
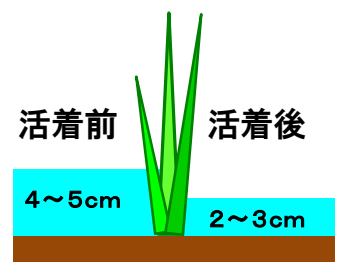


図3 植付け深の違いと茎数の推移 (普及課 H27 浅植え 2.5cm、深植え 4.7cm)

4 移植後はメリハリのある水管理で初期生育を促進

- ①活着するまでは水深4～5cmにして苗を保護し、新根の発生を促します。
- ②活着したら(新葉が見えたら)、水深2～3cmの浅水管理に切り替え、分けつの発生を促します。強風や低温が続くときは、一時的に水深をやや深めにして稲体を保護しましょう。
- ③ワキ防止のため、一発処理除草剤を散布する前に、水交換または軽い田干しを行いましょう。
- ④除草剤を散布した後の7日間は止水し、落水・かけ流しは控えましょう。



活着前後の水管理

「やまがた米づくりナビ」を作付け前から使おう！

「食味・収量点検マップ」を確認し改善項目を振り返ろう！



専用HPへアクセス

お問合せは農業技術普及課またはお近くのJA 営農指導員へ

**作業は焦らずに！
春季農作業事故防止運動
4/1～6/10**

**農機の始動前点検
トラクターの転倒・転落防止**